

Segment

▼ 母音と子音の違い

▼ 抽象的・音韻論的な区別

▼ 抽象的・音韻論的な区別1(極々一般的なもの)

子音の概念は、言語学の研究の進展とともに変化している。音声学的に調音や音響の観点から定義することは非常に難しい。

以下は一般的な音韻論的・文法的（大雑把ではあるが間違えではない）区別。

▼ アイウエオ以外

▼ 仮名をローマ字表記する時の5母音字以外

▼ 抽象的・音韻論的な区別2(現在の音韻論の観点による分類)

子音と母音の区別には個別言語ごとの語における音の分布を扱う音素配列論phonotacticsの要素がもともと加味されていて音韻論的色彩が強い。音節syllableと子音結合の詳細は第4章に譲るが、

▼ 母音は、音節の中心となる要素。

▼ 各音節の中で最も聞こえ度sonorityが高い音節の核nucleusあるいは頂点peakになる。

▼ 子音は、(特別な場合を除いて)音節の周辺的な位置を占める要素。

▼ 頭子音onsetや尾子音codaとして核の前後に結合して音節を形成する要素。いわば、子音の音韻論的定義は「音節の端marginに生じる音」。

→簡単。

▼ 具体的・音声学的な区別

▼ 調音の観点からの音声学的定義

▼ 子音は大抵、摩擦や閉鎖を伴う耳障りな音であるため、「喉頭から咽頭と口腔を経て、唇までの間に、呼気の流れを妨げる何らかの障害を伴なう音」ということになる。すると上にあるように、呼気流への妨害の程度が小さければ母音であって、大きければ子音ということになる。

→母音の調音でも、舌のどこかの部位を高めてアーチを作り、呼気流を妨げるような口腔による共鳴体を作る必要があるので不適切。

▼ 音自体の特性に基づく分類

▼ ところが、言語によって音素配列の環境に応じて、子音が音節の核となることがある。

▼ 例1

チェコ語のprst指やkrk首という語では、母音が隣接すれば子音となりうる/r/が核となっている。

▼ 例2

▼ 語末の//が子音の直後にある時

- Middle
- Thistle
- Panel

▼ 語末の鼻音/n, m/がある特定の音声環境（阻害音(後述)の直後）にある時

- Sudden /'sʌdən/, ['.sʌdn̩]
- Baptism /'bæptɪzəm/

▼ 例3

一般米語（GA）などのR音変種の方言では、強母音である、R音化した母音/r/-colored vowelを除いたもの、つまり弱母音の/a/と見なせるもので、-er/-orと綴られる語末の/r/は、子音に後続すると音節主音的な子音になる。

▼ 例

- teacher
- factor

音節主音的なsyllabicという語を使ってこの/r/は音節主音的な子音（成節子音）syllabic consonant（反子音semiconsonant(稀)）と呼べる。音節主音を表すIPAは下につく小さな縦線。

▼ 例

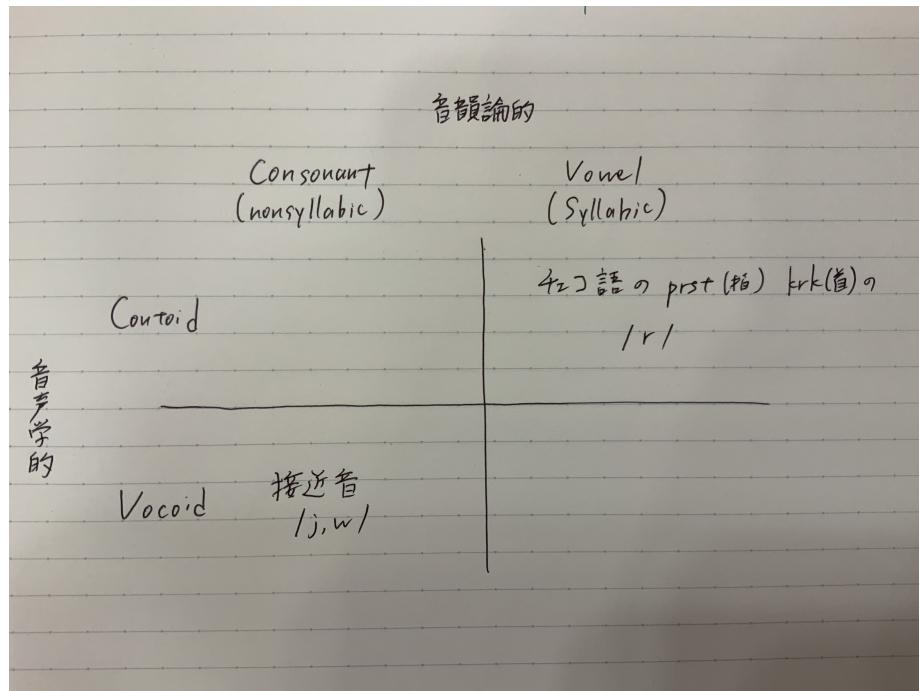
「ルーラー」の「r」は、母音として用いられる。音節の核となる音を示す用語を使って、この /r/ は 音節主音的 音節主音を表す国際音声字母 (IPA) の /r/ である。これらの語は /prst, krt/ と表記できる。他にもあるので、「チェコ語では /r/ が母音ではない」といえない。ちなみに音節の端にあって核にならない音 (nonsyllabic) と呼ばれる。

例で挙げたチェコ語には、このような単語が他にもたくさんあるので、「チェコ語では /r/ が母音として用いられる」としても間違いではない。

▼ 非音節主音 (的な) nonsyllabic

音節の端にあって核にならない音。

▼ 「子音」「母音」という区別は、音韻論のものだ、と割り切ることを迫られる。そして音自体の調音と音響の特性に基づいた（「このような分類をする音たちを母音、このような分類をする音たちを子音」という定義の仕方（？））、音声学的分類を試みた者がいる。Pike, K.L. である。音声学的子音 Contoid と音声学的母音 Vocoid である。



▼ 実験的アプローチ

▼ 現代では、各種実験結果に関心が移っている。

▼ 分節不可能性

▼ そもそも言語音は隣接する音が互いに影響し合うものである。分節音(と定義される単位)に区切ってIPAで表記すること自体が音韻論的である。しかし、それでは言語を表記出来なくなってしまう。ここでは、やむをえず音韻論的な説明も含めて音声学として記述する。

▼ 母音は、発音時の音声器官の狭めの程度が相対的に大きい要素。

▼ 子音は、発音時の音声器官の狭めの程度が相対的に小さい要素。

▼ →複雑（結局曖昧）。他の点も加味する必要があるケースもある。

▼ 例えば、/j/ と /i/ は、調音器官の狭めの程度は同じだが、安定性が違う。子音/j/は即座に次の母音に移ってしまうのに対して、母音/i/は比較的安定した調音だ。

▼ また、やや古風な言い方で半母音semivowelと呼ばれる英語子音の接近音approximant/j, w/(yes, way等の頭子音)は、単独で発音すれば、母音/i, u/とほぼ同じである。日本語の拗音も同様だ。これらの接近音は母音と区別するためにわたり音glideとよばれることもあるが、どんな子音でも母音が後続すれば、あるいは母音でも子音でも2つの分節音が連續すればわたり音は生じるので、この名称は支持できない。

▼ これまでの区別方法

▼ それをお互いで分類しようとすると…?

▼ 母音を子音として

調音点が複数ある接近音。

▼ 子音を母音として

母音の分類は、舌の形状（高さと前後の位置）と口の開け具合だけできかできず、その意味では子音の方が網羅的と言える。どこか物理学と化学のような関係を感じる。舌自体は子音も扱うが、その形状や開け具合に関しては何も定義できない。その様子が、分子や原子一般については扱うがその中の分類や研究をできない物理学を子音の分類に感じた。

▼ 【IPA準拠】文節音の分類と特徴

▼ 文節音の記述の仕方

専門家の間では、分節音それぞれに説明的なラベルをつけて、その音の名称としている。

↓その理由（そうするメリット・そうしないデメリット）

▼ 子音の名称は、アルファベットの文字名で/t/を[ti:]などと読んではならない。

▼ 子音は単独で発音すると分かりづらい。

▼ そもそも子音は後続の母音に逆行同化する為、実際には単独発音是不可能。

▼ 子音の後に母語の母音aをつけて日本語のア段の仮名のように発音すれば分かりやすいので、初心者向け授業などでよく用いられる。

▼ 外国語を発音するのは難しい。

▼ 発音が正確でも聞き手に伝わるとは限らない。

▼ IPAchartの表を見ながら練習すればすぐ習得できる。

▼ 音素の名前とラベル

以前は「記述ラベルdescriptive label」などと呼ばれていた（記述言語学の影響かな？）。

▼ 音声記述のステップ

▼ 表の見方を身につけよう。

- ▼ IPAを見てラベリングできるようになろう。
- ▼ IPAの表を再現できるようにしよう。
- ▼ 聞いてIPAに変換できるようにしよう。

/ / は音素の記述、[] は実際の発音（異音）の記述に用いられる。これは、音韻論と音声学の対立に通じる。

▼ vowel

▼ 調音的分類

▼ 母音BOR label

The backness-openness-(lip-) rounding label (Ashby 2011)

記述ラベル自体は母音でもは伝統的に用いられてきており、そのような母音の名称は一般的である。

▼ 例

[ʌ]はCentral open-mid unrounded 「中舌半広非円唇（母音）」

▼ 口母音と鼻母音

▼ 2つある軟口蓋が持ち上がって鼻腔への気流が遮断される。

▼ 軟口蓋が下がって鼻腔からも気流が流出すれば鼻母音となる。

▼ 有声母音と無声母音（母音の無声化devoicing）

英語にも日本語にもよく見られる。

▼ 母音の調音に関わる臓器は舌尖を除いた舌面と唇。舌と唇の形で分類ができる。

▼ 舌の位置

母音を発音するときに持ち上がる舌の位置の前後方向の相対的位置

▼ 前舌母音Front vowel

▼ 中舌母音Central vowel

▼ 後舌母音Back vowel

▼ 舌の高さVowel height

舌の高い部分の高さ。顎の下がり具合に連動している(口の開け具合も母音のパラメータの一つでは、と思ったがこれを読んで納得した)。

- ▼ 高母音High vowel
- ▼ 中母音mid vowel
- ▼ 低母音Low vowel
- ▼ 脣の形
 - ▼ 円唇Rounded
 - ▼ 非円唇Unrounded
 - ▼ 平口
- ▼ 音節的分類
 - ▼ 母音の調音の変化による分類
 - ▼ 単母音・單一母音Monophthong
 - ▼ 二重母音Diphthong
 - ▼ 三重母音Triphthong
 - ▼ 音節末に生起できるか否かによる分類
 - ▼ 抑止母音checked vowel
 - ▼ 開放母音free vowel
 - ▼ 母音の長さLength of Vowels

母音の長さで意味が変わる相対的
- ▼ consonant (1箇所One place)

子音は、狭窄Strictureを作ることで発声する。

 - ▼ 調音的分類
 - ▼ 子音VPM label

The voice-place-manner label (Ashby and Maidment 2005)
 - ▼ pulmonic (IPA chart)
 - ▼ 調音点1つ

狭窄の程度で3つに大きく分類できる。閉鎖から開きの広い接近へと、次第に調音器官同士の距離が広くなっていく。それが広

がりきったものが母音、とも言えるかもしれない。ただ、明確な基準はなく、とにかく「言語は相対的で曖昧だ。」

▼ 閉鎖音Stop

▼ 鼻音Nasal

▼ (呼吸をする時のように)軟口蓋が下がり呼気が鼻腔を通り抜ける時は鼻音が調音される。

▼ 口腔の完全な閉鎖軟口蓋の上げ下げで区別するというのは、丁度母音と鼻母音の対立に対応する。

▼ 軟口蓋が持ち上がって軟口蓋背面閉鎖Velic closureが起きて鼻腔Nasal cavityへの通路が閉されるもの。

▼ 破裂音

▼ (口腔での通路も一旦完全に閉ざされて)圧縮された呼気が閉鎖の解放と共に急激な勢いで放出された音。

▼ 破擦音

▼ 瞬間的な閉鎖

▼ ふるえ音

▼ たたき音

▼ はじき音

▼ 開きの狭い接近

▼ この方法で調音される音→摩擦音Fricative

▼ 開きの広い接近

▼ この方法で調音される音→接近音Approximant

▼ 正中面接近音central approximant

▼ 側面接近音lateral approximant

▼ 調音点2つ

▼ 個別のIPAが与えられている音素

▼ 両唇と軟口蓋

▼ /w/

一部のGA話者やスコットランド英語話者などが
why, whereなどの語頭のwh音として用いている。

▼ /w/

▼ /ɥ/

▼ 咽頭蓋

▼ /χ/

▼ /ç/

▼ /ʁ/

咽頭蓋破裂音

▼ /š/

無音歯茎硬口蓋摩擦音

▼ /ڻ/

有声歯茎硬口蓋摩擦音

▼ /ʃ/

▼ /f/

▼ 文字を2つ組み合わせる表記法

上か下に連結記号を書く。破擦音のような子音連結は言語ごとに異なるので、具体的な各言語の破擦音（たとえば英語の/tʃ, dʒ/）がここに掲載されることはない。

また、よく知られている破擦音の連結記号は省略されるのが普通になっている。

▼ non-pulmonic

子音は調音位置(調音点)と調音方法で分類する。

▼ other symbols (複数箇所Multiple places)

▼ 咽頭蓋音

▼ 歯茎硬口蓋摩擦音

▼ diacritics

\perp	Raised	$\overset{\perp}{e}$	($\overset{\perp}{\chi}$ = voiced alveolar fricative)
\top	Lowered	$\overset{\top}{e}$	($\overset{\top}{\beta}$ = voiced bilabial approximant)
\dashv	Advanced Tongue Root	$\overset{\dashv}{e}$	
\vdash	Retracted Tongue Root	$\overset{\vdash}{e}$	

○	Voiceless	n̩ d̩
~	Voiced	s̩ t̩
h	Aspirated	tʰ dʰ
,	More rounded	ɔ̩
c	Less rounded	ɔ̪
+	Advanced	u̩
-	Retracted	e̩
..	Centralized	œ̩
×	Mid-centralized	ɛ̩
l	Syllabic	n̩
o	Non-syllabic	e̩
~	Rhoticity	ə̩ ə̪

..	Breathy voiced	b̤	a̤		Dental	t̤	d̤
~	Creaky voiced	b̝	a̝		Apical	t̝	d̝
~~	Linguolabial	t̢	d̢		Laminal	t̢	d̢
w̥	Labialized	t̥ʷ	d̥ʷ	~	Nasalized	ẽ	
j̥	Palatalized	t̥ⱼ	d̥ⱼ	n̥	Nasal release	d̥ⁿ	
v̥	Velarized	t̥v̥	d̥v̥	l̥	Lateral release	d̥ˡ	
f̥	Pharyngealized	t̥f̥	d̥f̥	ɾ̥	No audible release	d̥ɾ̥	
~~	Velarized or pharyngealized			{̥}			

▼ suprasegmental